

## 1. 緒言

本研究は平成22年度卒、内田祐基、山岸直幸の研究である「中世出土銭の成分分析」を引き継いだものである。

本研究は中世社会を伝える文書史料多くが戦争や災害などで失われており、近世以前の状況を解明する上で不十分であるため、中世社会をより詳細に知るための資料として、出土銭貨の成分を分析し、そのための物質資料を集積しようという目的で実施した。

## 2. 研究のアプローチ

本研究では実際に出土した14~15世紀の古銭の分析を行った。分析対象は東京都葛飾区の葛西城内の井戸から出土した銭貨と多摩ニュータウンから出土した銭貨である。葛西城17枚、さらに多摩ニュータウン11枚の合計28枚を蛍光X線解析装置で分析した。また分析した銭貨をそれぞれナンバリングした。

## 3. 結果

合計28枚の分析を実施し、各銭貨の成分のデータが得られた(スペースの関係で省略)

また分析結果からどのように銭貨が鑄造されたか、双方の地域間で成分比率の近いものが存在するか否かについて比較、検討した。

表1. 葛西城出土の古銭成分

古銭 No.	含有成分				
	Cu(銅)	Pb(鉛)	Sn(錫)	Fe(鉄)	他
11Aa01	72.1	17	9.8	1.11	0
11Aa02	76.5	13.9	8.81	0.84	0
11Aa03	80.4	11.3	7.85	0.477	0
11Aa04	78	6.62	13.1	0.566	1.712
11Aa05	83.9	7.73	7.4	0.441	0.522

表2. 多摩ニュータウン出土の古銭成分

古銭 No.	含有成分				
	Cu(銅)	Pb(鉛)	Sn(錫)	Fe(鉄)	他
11Da01	42.7	34.1	21.1	0.936	1.09
11Da02	9.77	70.9	16.4	1.48	1.44
11Da03	74.4	16.2	7.4	0.913	1.03
11Da04	33.9	27.4	32.8	3.23	2.645

## 4. まとめ・考察

今回は前年度と違い破壊検査はできず、非破壊検査のみで分析を行った。しかし葛西城で出土した銭貨は井戸の中にあつたものでほとんどサビがなく、良好な状態を保っていた。幸いにも状態の良いものを複数枚お借りすることができ、非破壊で十分な分析が行えた。

成分結果は同じ測定方法を用いても成分の違いがあるデータがあつた。表1は葛西城出土の洪武通宝の成分分析、表2は多摩ニュータウン出土の洪武通宝の成分分析結果である。表1ではCuが70~80%、Pbが20%以下、Snが10%前後、Feが0.5~1%にまとまっていた。このことから銭貨は同じ鑄造元で作られてあまり流通しなかったのではないかと推測できる。

表2はCuが10%のものから40%、70%などバラつきがあり、それに対してPbやSnの割合が増減している。このことから多摩ニュータウンは周辺地域からの銭貨流入が各方面からあつたと考えられ、このため銭貨の流通が盛んであつた事。また、鑄造者が銭の質を下げて銭数を増やしていたのではないかと推測できる。またPbが4割以上超えている銭は銭としての強度が足りず、銭として扱うことが困難なため、神仏への供物として使われたのではないかと推測ができる。

表1と表2を比べると表1の古銭No.11Aa01と表2の11Da03は成分比率が似ている。このことからこの2枚は同じ鑄造元で作られたのではないかと推測できる。

## 5. 今後の発展

今回葛西城と多摩ニュータウンの銭貨の成分を分析したが、物資資料の分析枚数がまだ不足しており、今回の結果では可能性の推測のみを述べた。今後は分析対象を増やし、その当時の銭貨の成分について一定地域におけるある程度基準となる成分比の究明を目指したい。

## 文献

- [1] 木村礎:「東京低地の中世を考える 葛飾区郷土と天文の博物館編」,PP.135-PP169,1995年
- [2] 山岸直幸:「3902 南関東中世銭貨の成分分析」,サレジオ高専 歴史資料学研究室 卒業研究,2010年